

## 14 持続した行動における患者の検査値の比較

— 血圧測定を通して —

長野県立木曽病院 血液浄化療法室<sup>1)</sup> 同内科<sup>2)</sup>  
中村佐代、児野徹、水野孝子、小林明美、茂澄文美、渡辺伸行、<sup>1)</sup>小山貴之<sup>2)</sup>

### 【はじめに】

透析治療は一生にわたる治療法であり、安定した治療と透析患者様の QOL の向上において、患者様自身の自己管理は重要となってくる。当院では血圧測定表を使用することで、血圧の測定値がわかり、自分の体調に関心を持てるよう患者様への指導を行っている。ポール A. アルバートらは、著書『初めての応用行動分析』の中で『人がある行動をとる時、その行動が持続するのは、その行動に好ましい結果や効果が伴うからである。好ましい結果が伴っていると、その経験は行動の持続を動機づける力として働く』と述べている。そこで、『血圧測定をする』という行動が持続できる患者様は、自己管理が比較的良好であり、体重増加率及びカリウム値の上昇も少ないという好ましい結果が伴うのではないかと考え、持続できない患者様との比較を行った。

### 【目的】

血圧測定が持続できることと、検査値との関連を明らかにするため調査を行った。

### 【用語の定義】

血圧測定が持続できる：

6ヶ月間以上にわたり、毎日血圧測定が実施できていること。

血圧測定が持続できない：

全く血圧測定を実施しないこと、断続的なこと、実施しても6ヶ月未満であること。

検査値：

毎月行う定期検査の中で検査日当日の体重増加率と透析前カリウム値の6ヶ月分平均値のこと。

### 【方法】

1. 期間は2003年1月から6月とした。ただし、検体が溶血した月の検査値は除き、代わりに7月分の検査値を調査した。
2. 対象は当院維持透析患者様41名とする。
  - 1) 対象を血圧測定が持続できる群（以下、持続群とする）21名と血圧測定が持続できない群（以下、非持続群とする）20名に分類した。
  - 2) 両群間の検査値の有意差を Mann-Whitney の U 検定で比較した。

### 【結果】

体重増加率の比較においては、持続群の平均5.53%、非持続群の平均5.08%で、両群間に有意な差は認められなかった。（図1）

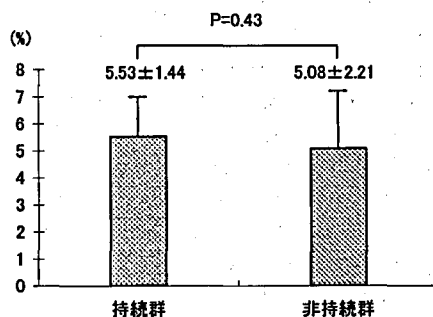


図1 体重増加率の比較

カリウム値の比較においては、持続群の平均 5.41 mEq/L、非持続群の平均 5.32 mEq/L で、両群間に有意な差は認められなかった。(図 2)

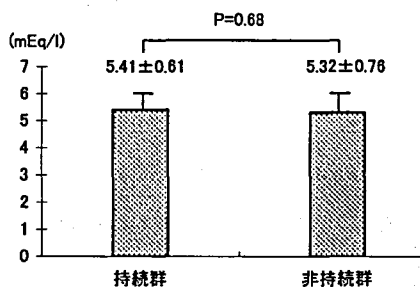


図 2 カリウム値の比較

### 【考察】

私達は透析治療を受けている患者様が、快適に毎日を過ごせる為に、自己管理できるような援助を目指している。血圧測定が持続できる患者様は、自己管理が良好で検査値の上昇が少ないのではないかと考え、両群間で比較したところ、有意な差は認められなかった。このことから、血圧測定という行動が持続できることと、体重増加率・カリウム値との関連は薄いと考えられる。また、今回の比較からは持続群の患者様の自己管理が良好だとはいえない。しかし一方では、この調査をきっかけとして、血圧測定を始める患者様、食生活や、日常生活の質問をされる患者様など、数名の方から自分の体調に関心を持つ言動がみられるようになった。岡堂は『行動を起こす重要な決定因は、個人の信念、価値、欲求、および動機に関係する。健康に関する動機は、その人個人の優先権に左右され、その重要性は年齢、性別、職業、教育、文化的価値、素質によっても異なってくる。』と述べている。個人背景が多様多様である為、これらの要因を踏まえた上で、自己管理につながるような患者様への指導が今後の課題と考える。

### 【まとめ】

- ・ 血圧測定の持続と、体重増加率・カリウム値との関連は薄いと考えられる。
- ・ 持続群の患者様が自己管理良好とはいえない。
- ・ 今回の調査をきっかけにして、数名の方が自分の体調に関心を持ち始めている。
- ・ 今後は、個人背景を踏まえた上での自己管理につながるような指導が課題と考える。

### 【引用文献】

- 1) ポール A. アルバート 他、佐々門徹 訳：初めての応用行動分析，17-19，145-147，二瓶社，1992
- 2) 岡堂 哲雄：病気と人間行動，87-88，中央法規出版株式会社，1988

### 【参考文献】

- 1) 宮本 真己：セルフケアを援助する，日本看護協会株式会社，1996
- 2) Ruth Wu, 岡堂哲雄 訳：病気と患者の行動，医歯薬出版株式会社，1990
- 3) 奥宮 暁子：生活調整を必要とする人の看護 I 中央法規出版株式会社，1995
- 4) 日本看護協会(社)：第 29 回日本看護学会論文集 看護総合，日本看護協会出版会，1998
- 5) 日本看護協会(社)：第 31 回日本看護学会論文集 看護総合，日本看護協会出版会，2000
- 6) 春木 繁一：透析患者の心とケア 正編，続編，メディカ出版株式会社，1999
- 7) 成川 暢彦ほか：QOL を視野に入れた透析，クリニカルエンジニアリング 8，830-834，秀潤社，2003
- 8) 岡谷 恵子：看護研究のすすめ方・よみ方・つかい方，日本看護協会出版会，1994
- 9) 市原 清志：バイオサイエンスの統計学 -正しく活用するための実践理論-，株式会社南江堂，1999